# 肺がん死亡率

## 定期検診

急増する肺がんによる死亡を食い止めようと、市では四月から肺がん検診（レントゲン検診）を実施することになりました。

かつては助かることが少なかった肺がんも、早期がんなら六〇％が治せるようになりました。しかし、肺がんは症状が出にくいため、早期発見が難しいのです。

手遅れにならないうちに発見、治療するために、定期検診を受けましょう。

### 肺がんから身を守る

家保英隆（中央保健所医師）

昭和五十六年より、悪性新生物による死亡は全死因の第一位になり、その比率は年々増加しています。更に重大なことは、社会的にも家庭的にも重要な位置にある働き盛りの年齢層から高年齢層にかけての三十五歳から七十四歳でトップを占めていることで、死亡者の三五％を占めています。

しかし、すべてのがんによる死亡が増加しているわけではありません。例えば、胃がんや子宮がんは、医療技術の進歩や検診等の保健活動により、早期発見、早期治療が一段と進み、人口の高齢化がありながらも死亡数は減少しています。逆に、著しい増加を示しているがんとして、肺がん、肝がん（男性）乳がんなどがあげられます。

特に肺がんは、人口の老齢化を考慮に入れて修正しても、昭和二十五年と比較して、男性で九倍、女性で七・六倍とかなりの上昇を示しています。また、将来の発生予測では、一九九五年ごろには最も高率のがんになると予想されています。ここで肺がんについて更に詳しく書いてみましょう。

一口に肺がんといっても、いろいろな種類があります。病気の進行がゆっくりとしたがんから、非常に進行の速いがんまでいろいろありますし、喫煙に関係のあると言われているがんもあれば、関係のあまりないと言われているがんもあります。それらの原因も悪性度も予後も異なるすべてを合わせて、肺にできるがんの総称として肺がんと言っているのです。

まず、喫煙に関係のあるがんとして、二扁平上皮癌があります。これは全肺がんの四〇％を占めています。比較的発生した所で進展し、転移の少ないタイプで、悪性度は低い傾向にあります。もう一つ喫煙に関係のあるがんとして、小細胞癌があります。このタイプは、早期に転移し、予後が良くありませんが、日本ではアメリカなどと比べて頻度が低く、一三％程度と言われています。

喫煙にあまり関係のないと言われているがんとして、腺癌があります。これは肺野に多くみられ、悪性度は中程度です。日本での頻度は四〇％ぐらいと言われています。この外にもいろいろありますが、喫煙に関係のあると言われているがんが過半数を占めているのが注目されます。

では、今後増加が予想される肺がんにどう対応したらよいでしょうか。大きく分けて二つあります。肺がんを早期に見つけて治療してしまうことと、肺がんにならないようにすることです。

肺がんを発見する方法としては、症状等があってから医療機関で受診することと、定期的に検診（肺がん検診）を受けて発見に努めることの二つがあります。肺がん検診では、比較的早期の肺がんが発見される割合が高いと言われています。

肺がん検診は、肺がんの増加が考えられる四十歳以上の人を対象にしており、レントゲン検査と喀痰細胞診（タンの検査）からなっています。レントゲン検査は、従来から実施されている結核検診のフィルムを用いますので、結核検診を受ける方は更に写真を撮る必要はありません。ただ、結核検診のときと比べると、二人の医師による読影や、前年の写真との比較を行いますので、結果のお知らせが遅くなります。これは、検診の精度をより向上させるためですので、ご理解をお願いします。

喀痰細胞診は、タンの中にがんの細胞が出やすい大きな気管支のがんで陽性になりやすくなっています。この部位にできるがんは喫煙に関係のあるがんが多いので、対象者としては次のような人が考えられます。

①五十歳以上で喫煙指数（喫煙年数×一日当たりの本数）が六百以上の人

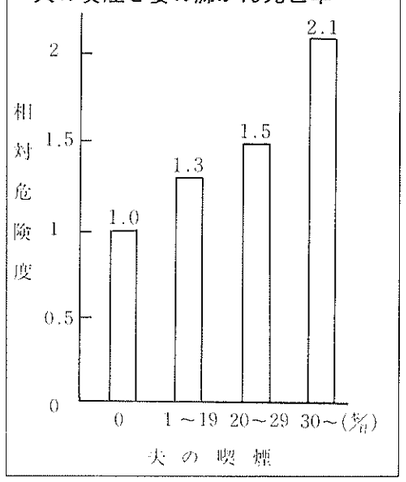
②四十歳以上で半年以内に血痰のあった人

また、確かに肺がん検診では早期の肺がんが見つかる割合が高いのですが、前に述べたように肺がんには進行の速い例がありますので、血痰や長く続くセキ、タンがあるときには医療機関で受診してください。

もう一つの重要なことは、肺がんにかからないように心がけることです。肺がんの半分以上は喫煙と関係のあるがんですので、禁煙が重要になってきます。図1に示すように、喫煙本数が増加するほど肺がんによる死亡は増加します。また、図2に示すように、夫に喫煙習慣がある場合には、たとえ妻に喫煙習慣がなくても、妻の肺がんによる死亡率は上昇します。

以上のことをまとめると、肺がんによる死亡を避けるためには、まず自らの健康に関心を持つことが重要です。そして、血痰や長く続くセキ、タンがあるときには、医療機関で受診することです。それと合わせて、年一回肺がん検診を受診するなど、早期発見に努めることと、禁煙の効果について理解し、行動していくことが非常に重要となってきます。

図2．夫の喫煙と妻の肺がん死亡率






# 増え続ける

## 受けよう

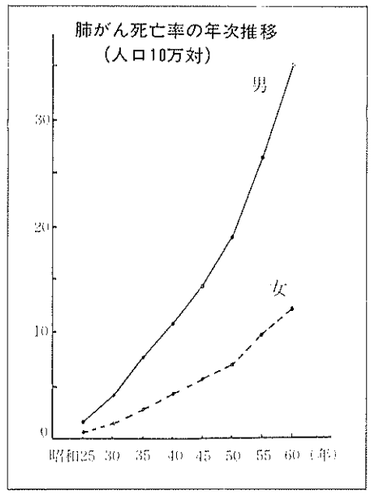
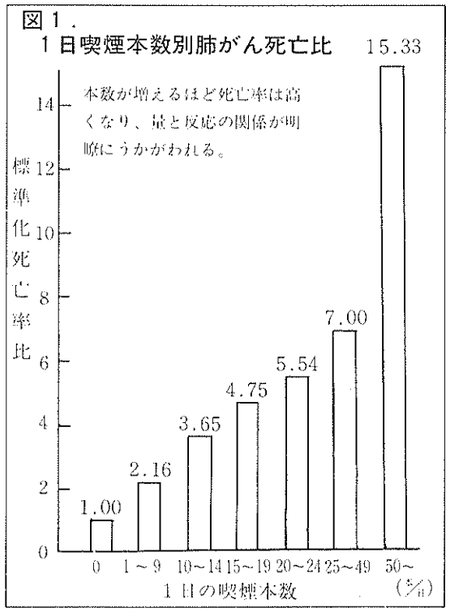
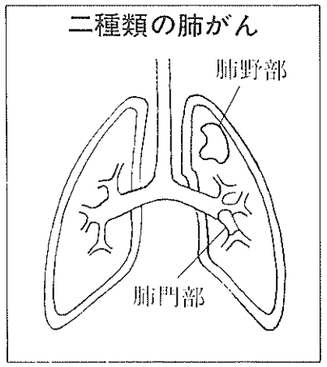



図1．1日喫煙本数別肺がん死亡比




二種類の肺がん